

1. 本研究の位置づけ

本研究では、19世紀アメリカの超越主義者ブロンソン・オルコット（Alcott, Amos Bronson, 1799-1888）の教育思想について論じられている。

本研究では、オルcottの超越主義思想とそれに基づく教育思想が、西洋の哲学史における伝統的な超越主義思想、アメリカの同時代の超越主義者の思想、アメリカにおけるいくつかの教育活動や社会的な思潮、後世のアメリカ進歩主義教育の思想や活動など、時間的に幅広い展望の中に位置付けられている。そして、それらとの思想的な類似性について比較検討され、それらとの間での継承・影響関係について考察されている。本研究では、そのようにオルcottの超越主義思想が時間的に幅広い展望の中に位置付けられて、その構造的な把握が行われることによって、オルcottの教育思想とアメリカ進歩主義教育との関連について検討されている。

このようなアプローチによって、本研究では、オルcottからアメリカ進歩主義教育へとつながる思想的な水脈の存在が明らかにされている。

オルcottは、19世紀のアメリカ・ニューイングランド地方で超越主義者として思想を展開した。しかし、同時代の同地域で同じ立場で思想を展開したエマソンと比較して、アメリカの進歩主義教育に対する思想的影響については高く評価されていない。また、オルcottの超越主義思想に関する評価についても、エマソンの方が一般的には高い。わが国においては、娘のルイーザ・メイ・オルcottの方が、『若草物語』の作者として有名かもしれない。確かにエマソンの「自己信頼」の思想に基づく児童尊重の主張は、それまでのピューリタニズムに基づく子ども観からの転換点となり、後にデューイやパーカーにも、思想的に明確に評価・継承されている。この点でエマソンの思想が、一般的には、アメリカの進歩主義教育思想における「児童中心主義」の原点と見なされている。

しかし、この時代の超越主義者の中で、オルcottは、教師として自ら教育実践に携わり、その思想に基づいて新たに教育活動を試みた唯一の人物である。本研究の主題は、進歩主義教育における教育実践を特徴づけている教育活動の方法に対する具体的な思想的影響という点では、オルcottはもっと高く評価されるべき人物であるという問題意識に基づいて設定されている。本研究では、そのような問題意識から、オルcottの超越主義思想を幅広い展望の中で体系的に整理した上で、オルcottの超越主義思想が後のアメリカ進歩主義教育に与えた思想的影響について明らかにし、そのような観点からオルcottの超越主義思想について再評価することが試みられている。

オルcottについての研究は、アメリカでは超越主義思想という観点からは、一定の積極的・肯定的な評価がなされている。また、伝記的な研究書はいくつか出版されている。しかし、オルcottの教育思想についての評価は低く、オルcottの教育実践をテーマにした研究書はあるものの、本研究のように、時間的に幅広い展望の中にオルcottの超越主義思想を位置付け、オルcottの超越主義思想を構造的に把握したうえで、その教育思想の特色を明らかにした研究は少ない。また、オルcottの超越主義思想に基づく教育思想から進歩主義教育への連続性を論証するというように、その後世に対する積極的な意義について明らかにした研究は見られない。わが国の教育学においても、オルcottに関

する研究書はこれまで1冊しか存在しない。その研究書において、オルコットの教育思想はピューリタニズムへの抵抗として評価されつつも、超越主義思想については非社会的な個人主義的思想として否定的に論じられている。

この点で、本研究は、オルコットの超越主義思想について、教育思想という観点から、その形成から継承までの系譜を体系的に取り扱っているという点で、また、オルコットの超越主義思想のアメリカ進歩主義教育への影響を明らかにしたという点で、わが国の教育界において初めての研究であり、世界的にも数少ない研究である。オルコット研究としても、オルコットの超越主義思想の構造を、教育思想を前面に出しつつ、19世紀に限定されない広がりから、系譜的に明らかにした体系的な研究として位置づけることができる。

2. 本研究の構成と概要

本論文は、「序章」で「本研究の課題」と「考察の視点」の提示、「先行研究」の検討がなされている。その後、「第1部」から「第4部」までの4部立てで構成されている。「終章」では、本論文の論点がまとめられている。

「第1部 オルコットの超越主義思想の形成と展開」では、第一章で、オルコットの学童期から青年期にかけての経歴とその経験—行商、クエーカー教徒との出会い、チェシャでの学校教師、ボストン・フィラデルフィアでの思想的修業など—が、オルコットの超越主義思想の形成に与えた影響について、第二章で、オルコットの超越主義思想における「良心の内発性観」などについて、第三章で、オルコットの超越主義思想がその後の生涯において導いた実践的な活動—テンプル・スクール、超越クラブとフルートランツ、コンコード教育長、コンコード哲学学校—について論じられている。

「第1章 オルコットの超越主義思想の形成と展開」では、第一に、オルコットが正規の学校教育は小学校しか受けなかったにもかかわらず、行商の経験を通じて生活と密接に結びついた経験知への信頼、およびそれに基づく「自己信頼」の感覚を形成したこと、また、クエーカー教徒との出会いが、人間の道徳的向上に貢献するために教師を志す契機となったことが論じられている。第二に、チェシャにおける教師としてのオルコットの教育実践の特色、すなわち、従来のカルヴィニズム的児童観の否定、子ども一人一人を全き善きものとして、生来的に賢明な存在として扱った教育活動について論じられている。第三に、ボストンとフィラデルフィアでの思想的修業—教師生活、読書、結婚と娘の誕生・養育、教育家ラッセルとの交流など—を通じて、自らの超越主義思想が固まったことが論じられている。このように学童期から青年期にかけての経験が取り上げられ、1830年代の超越主義思想形成の前史として考察されている。

「第2章 オルコット超越主義思想の特質」では、第一に、ニューイングランドにおける超越主義が、カントの超越論的観念論のからの起源、およびピューリタニズムへの抵抗としてのユニテリアニズムからの派生として、哲学的・宗教的に位置付けられ、その系譜においてオルコットの超越主義思想の特色について論じられている。第二に、オルコットの教育思想の特色である子どもの「良心の内発性観」が検討されている。そして、それについて、子どもが本来持っているものを引き出すという自己教育の原理であると論じられ、

ピューリタニズムへの抵抗、合理主義万能の時代への反動、産業化・都市化への抵抗という性質を有していると特色づけられている。

「第3章 オルコットによる超越主義思想の実践」では、ボストンに開設したテンプル・スクールでのその特色となっている教育活動—子どもの尊重、自治活動、会話など—の経緯、およびそれに対する批判—黒人少女の入学問題など—、フルートランズの建設とその失敗、コンコード教育長としての学校改革の試み—コンコードの博物誌の教材制作の構想など—、晩年の成人を対象としたコンコード哲学学校の開設と活動が取り上げられている。そして、オルコットの超越主義思想がそれらの活動を導いていたこと、それぞれの活動の有する特色を生み出していることが明らかにされている。

「第2部 オルコットによる超越主義思想への影響」では、オルコットの超越主義思想が哲学史におけるどのような思想から、どのように影響を受けたのかについて検討・考察がなされている。第4章で、超越的世界の意味づけとして、古代中世の哲学—プラント、新プラトン主義、神秘主義思想—が、第5章で、超越的認識の背景として、近代西欧の哲学—バークリー、ドイツ超越的観念論、イギリス・ロマン主義など—が、第6章で、超越論的「知性」概念の拡充として、オルコットと交流のあった思想家—エマソン、ソロー—が、第7章で、オルコットの超越主義的实践理論への影響関係のあった思想—ソクラテス、アダム・スミス、ペスタロッチ主義運動—が取り上げられて検討されている。

「第4章 オルコット超越主義思想への影響」では、オルコットの思想の超越論化が1833年にプラトンの著作に触れることを契機に加速されたこと、また、前年のコールリッジを通じてのドイツ観念論への接触と相俟って、オルコット思想において精神的なものの比重が高まったことが明らかにされている。そして、その過程におけるプラトン、プロティノス、ベーメ、ゲーテ、スーデンボルグからの思想的影響が、アリストテレス、ベーコン、ロックなどの思想に内包されていた自然主義的経験主義的要素を克服するための超越論的視点をオルコットに提供したと論じられている。

「第5章 超越論的認識論の背景」では、オルコットの超越主義思想に継承されたヨーロッパの思想として、バークリー、ドイツ超越的観念論、イギリス・ロマン主義が取り上げられている。そして、オルコットが、バークリーを観念論として理解して児童神性論を発展させたこと、シェリングの超越的観念論における「知的直観」についての考え方が摂取されたこと、コールリッジの拡大された「理性」概念がオルコットの人間精神に関する探究に枠組みを与えたことなどが論じられている。

「第6章 超越論的「知性」概念の拡大」では、オルコットと超越主義思想運動を共にしていたエマソンとソローが取り上げられ、それぞれの思想のオルコットへの影響について検討されている。そして、エマソンと同様の「自然」認識やソローと同様の実験主義的傾向が、すでに彼らと交流する以前にオルコットにおいても独自に形成していたことが明らかにされ、その上で、エマソンからは思惟の形式、ソローからは「身体」を通じての対象とのかかわり方に関して影響を受けて、オルコットは自らの超越主義思想を拡大したと論じられている。

「第7章 オルコット超越主義的实践理論への影響関係」では、ソクラテス、アダム・スミス、ペスタロッチ主義が取り上げられ、それらのオルコットの超越主義的实践理論に

対する影響について考察されている。そして、ソクラテスの教育方法から、子どもたちが自ら普遍的真理を弁証法的に引き出していくための「会話」による方法、アダム・スミスの道徳論における「共通の良心」から、子どもたちの感情や感覚に訴えて共感に基づく自己統治的な教育の方法、オーウェンを通じてペスタロッチ主義から教育的愛情と知的発達における感覚的知覚の重視などの影響を受けたと論じられている。

「第3部 超越主義思想の教育への影響」では、オルコットの超越主義思想に基づく教育論や教育実践が、同時代のアメリカの教育思想や社会的な思潮に与えた影響について論じられている。第8章で自己教育論が、第9章で女子教育論が、第10章で黒人教育論が、第11章で宗教教育論が取り上げられて、オルコットからの影響について検討・考察されている。

「第8章 超越主義思想の展開1—自己教育論として」では、超越主義では、神が人間の中に位置付けられ、人間の精神の中に神性が見出されており、良心の働きに基づく「自己陶冶」による自己救済が可能であると考えられていることが明らかにされ、そのような観点から、オルコットの超越主義に基づく教育思想が、自己教育、すなわち、自律を目的とする近代教育思想との間で共通性を見出すことができると論じられている。

「第9章 超越主義思想の展開2—女子教育論として」では、オルコットがピーボディやフラーなどの女性超越主義者から影響を受けたことが明らかにされている。そして、そのことが娘たちへの教育をはじめ家庭教育の重視、さらには社会活動を通じての女性教育への積極的な関与となったと論じられている。さらに、第一波フェミニズム運動家たちとの交流を通じて、教育も含めた女性の権利拡張運動に関与したことが述べられている。

「第10章 超越主義思想の展開3—黒人教育論として」では、超越主義思想が黒人解放運動に与えた影響という観点から、オルコットが開設したテンプル・スクールへ黒人少女を入学させたことが取り上げられている。そして、そのこと自体は失敗に終わったものの「草の根運動」として、後の黒人市民運動の担い手たちに与えた意義について考察されている。

「第11章 宗教教育論として」では、オルコットがピューリタニズムとの対決という形式でキリスト教の自由主義化を推進し、また、個人による自己超越の必要性を説くことにより、宗派に基づかない宗教教育の可能性を開いたことが取り上げられている。そして、そのことがコモンスクールの設置の理念に継承され、その実現と共に制度化されたと論じられている。

「第4部 超越主義から進歩主義教育に流れる思想的水脈」では、オルコットの超越主義思想が、後のアメリカ進歩主義教育に、どのような側面において—プラグマティズム—、また、どのような役割として—ドイツ観念論からプラグマティズムへの中継点、プラグマティズムの人格主義による補完、「新しい教会」構想による宗教的回路—、さらに、どの人物のどのような思想—ピーボディ、パーカー、デューイーに継承されているのかについて検討・考察されている。

「第12章 エリザベス・ピーボディの幼児教育思想—A.B.オルコット教育論の受容と批判」では、テンプル・スクールで助手をつとめ、後にアメリカにおける幼稚園普及運動

に携わったエリザベス・ピーボディの幼児教育理論へのオルコットの教育理論の影響について考察されている。そして、ピーボディがオルコットを肯定的に受容しつつも、フレール主義への傾倒によって活動的要素を強調したと論じられている。

「第 13 章 プラグマティズムへの影響—W.ジェームズとの関係から」では、物質主義、懐疑主義、無神論への対決を基調としたコンコード哲学学校へのジェームズの参加に焦点が当てられている。そして、それを契機としてジェームズの関心が変化したこと、すなわち、生理学を基盤とした「自然科学としての心理学」から経験的事象としての「神的なもの」への関心の変化が指摘されている。宗教や倫理に科学的真理探究の方法を適用するというジェームズの新たなアプローチに対するオルコットの思想的影響について検討・考察されている。

「第 14 章 ドイツ超越観念論からプラグマティズムへの中継点としての役割」では、第一に、オルコットの「自然を精神の象徴」と見なす超越主義的自然観とジェームズの主客未分状態としての「純粹経験」「根本経験」が比較され、共に精神の働きを統括する「人格」が強調され、人間中心の態度という点で共通性を見出せることが指摘されている。そして、そのような両者の考え方について、カントの認識論に対する批判であると同時にカントの人間学の踏襲であると論じられている。第二に、デューイのヘーゲル哲学からの影響に関して、オルコットが果たした中継点としての役割について考察されている。ヘーゲルの弁証法によるダイナミックな人々の関係性の再構築という論理は、オルコットの時代には、南北戦争後のアメリカ社会の再統一という社会的な課題を背景に、また、デューイの時代には、拡大した経済的格差の克服によるアメリカ社会の再統一という社会的な課題を背景に、アメリカの社会思想に影響を与えた。そして、ヘーゲル哲学の受容と克服という点で、オルコットが主張した「共通の良心」や方法として重視した「会話」による相互主観的なコミュニケーションは、人々の知性的な協働による社会改良という、デューイによるヘーゲル哲学に対する克服のための先行的な視点となっていたと論じられている。

「第 15 章 プラグマティズムへの超越主義の影響の一断面—ミッシング・リンクとしてのブロンソン・オルコット人格主義」では、オルコットの「人格」概念がエマソンの「個性」概念と比較されて、「人格」概念が有する社会的な関係性としての性格が明らかにされている。そして、社会性を内包するデューイの「個性」概念は、オルコットの「人格」概念においてすでに提唱されていると論じられている。そこにエマソン—デューイという連続性に対する、オルコット—デューイという連続性の存在が明らかにされている。

「第 16 章 超越主義とプラグマティズムの「宗教」的通路—オルコットの人格主義に基づく「新しい教会」構想を手掛かりに」では、オルコットの「新しい教会」構想が検討されている。そして、オルコットが、当時の時代状況の中で、すなわち、超越主義によるピューリタニズムを克服しようとする動きや宗派に基づかない宗教の主張の中で、排除され消失しかかっている「神」概念や「神域」を回復させようとしたことが明らかにされている。そのような観点から、ジェームズやデューイの宗教論が取り上げられ、それらの中にオルコットの「新しい教会」構想と共通する宗教観が見られると論じられている。

「第 17 章 進歩主義教育への影響—パーカー、デューイへの影響」では、オルコットの教育思想が進歩主義教育思想へ実践レベルにおいて与えた影響について、パーカーとデューイが取り上げられて考察されている。そして、ピューリタニズムに対する批判として

オルコットが採用した子ども中心の教育的な方法は、カリキュラム全体が子どもの経験に収斂されていくように配列されていることが明らかにされている。そのような点で、オルコットの教育方法は、パーカーのクインシー運動やデューイの実験学校へと原理的に継承されていると論じられている。

「終章 オルコット教育思想の再評価と超越主義の思想史的再定位」では、本研究を通じて明らかになったオルコットの教育思想の意義、オルコットの超越主義の思想史的な位置、及びオルコットの進歩主義教育への影響について確認がなされている。

3. 本研究の評価

本研究は、オルコットの超越主義思想について構造的に把握した上で、それに基づいてオルコットの採用した教育方法について、また、その教育思想として有する意義について論じられている。それとともに、本研究では、ソクラテス、プラトン、ロック、カント、ドイツ観念論哲学、スコットランド道徳哲学、イギリス・ロマン主義などヨーロッパの伝統的な哲学・思想からの継承関係、およびエマソンなど同時代の思想家との影響関係について検討・考察され、西洋の哲学史における超越主義思想の系譜の中に、オルコットの超越主義思想が位置付けられている。また、オルコットの超越主義思想が同時代のアメリカの教育活動や社会の思潮に与えた影響についても検討・考察されている。そのようにオルコットの超越主義思想の構造的な把握の上に、過去と同時代の哲学・思想・社会的な思潮という幅広い網の目の中で、オルコットと他の哲学・思想との間の類似性や継承・影響関係が検討・考察されて、オルコットの超越主義思想を時間的に幅広い展望に位置付けるという作業が行われている。そして、本研究ではそのような網の目が後の時代にまで拡張され、後のアメリカ進歩主義教育の思想が検討され、オルコットの超越主義思想とそれらとの間に見られる類似性や影響関係が明らかにされている。そのようにして、オルコットの超越主義思想とそれに基づく教育活動に関する思想が、アメリカ進歩主義教育の思想的水脈の一つの水脈であることが論証され、オルコットの教育思想のアメリカ教育思想史における意義が明らかにされている。

本研究の学術的な価値を次の点に見出すことができる。

第一に、オルコットの教育活動について、彼の超越主義思想についての構造的な解明と把握に基づいてその意義が検討され、そのようにして彼の教育思想の特色が彼の超越主義思想の構造の中で明らかにされている。しかも、本研究では、オルコットの超越主義思想そのものについても、ヨーロッパの古代から近代にいたる哲学・思想、アメリカの同時代の思想との比較検討を通じて類似性や継承関係が検討・考察され、哲学的な系譜における位置付けがなされている。そのようにオルコットの教育思想についての考察が、オルコットの超越主義思想についての哲学的な展望を踏まえて行われている。このような研究は、アメリカにおいても数は少なく、わが国においては初めてとなる研究である。

第二に、オルコットの超越主義思想における「人格」概念が分析され、その進歩主義教育思想への影響が明らかにされている点である。これは、これまで同時代のエマソンの進歩主義教育思想への影響とは異なった、もう一つの影響関係（水脈）の解明である。本論

文では、そのような影響について、ドイツ観念論からプラグマティズムへの中継点、プラグマティズムに対する人格主義による補完、「新しい教会」構想による宗教的回路という観点からも考察されているが、それらを統合する観念が「人格」であったことが論証されている。神の内面化による人間の自らの意志による自己教育、子どもへの信頼、自律的な人びとの関係性に基づく社会の再構築など、後のパーカーやデューイの思想と共通する論点がすでにオルコットの超越主義思想において提起されていたことが指摘されている。オルコットの教育思想については、後の進歩主義教育の思想家や実践者たちからはほとんど引用されることはなく、そのためオルコットとの連続性については十分に解明されることはなかった。この点で本研究は、オルコットの「人格」概念を手がかりに、オルコットの超越主義思想がアメリカ進歩主義教育へとつながる一つの思想的源泉であり、また、そこからの水脈が存在していることを明らかにしている。オルコットの教育思想の意義をそのような観点から新たに評価した数少ない研究である。

本研究はこのように過去・同時代・その後の哲学や教育思想の幅広い展望の中にオルコットの超越主義思想を位置づけて検討してその特色を明らかにするとともに、そこにおけるさまざまな哲学・思想との類似性を明らかにし、それに基づいて関連性を検討・考察するという、オルコットの教育思想についての体系的な研究である。しかし、審査員からは、思想の類似性に基づいて相互の間の関連性を論証するアプロプリエーション研究としての作業に若干の課題が残されているという指摘もなされた。この点については今後の研究においてさらに精密に作業が行われなければならない。

総括するならば、本研究はこれまでアメリカ哲学・思想史において点景にとどまっていたオルコットの超越主義思想を、哲学・思想史の幅広い展望の中に位置付けるとともに、後の進歩主義教育思想へと続く水脈の源泉となっているというように再評価した。アメリカにおいても、わが国においても、アメリカ教育思想の研究においてきわめて重要で画期的な独自性の高い研究である。先のような課題は残されるものの、審査員一同は本論文が博士（教育学）に値するものと意見が一致した。